アントニン・ドヴォルザーク
Antonín Dvořák (1841-1904)

交響曲 第8番 ト長調 作品88
Symphony No. 8 in G major, op. 88

1 第1楽章: Allegro con brio [9:56]
2 第2楽章: Adagio [10:21]
3 第3楽章: Allegro grazioso [6:37]
4 第4楽章: Allegro ma non troppo [8:50]

交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界より》
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

5 第1楽章: Adagio – Allegro molto [9:26]
6 第2楽章: Largo [13:03]
7 第3楽章: Scherzo. Molto vivace [8:04]
8 第4楽章: Allegro con fuoco [11:50]

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berliner Philharmoniker

指揮: ラファエル・クーベリック
Conducted by Rafael Kubelik

録音: 1966年6月(op. 88)、1972年6月(op. 95) ベルリン

UCGG-9027
480 5315

A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

STEREO

ADD

P.D.

Ⓟ 1966 (op. 88) / 1973 (op. 95)
Deutsche Grammophon
GmbH, Berlin

UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ
www. universal-music. co. jp/classics/

Marketed & Distributed by
UNIVERSAL MUSIC LLC
Made in Japan

11・9・28

レンタル禁止

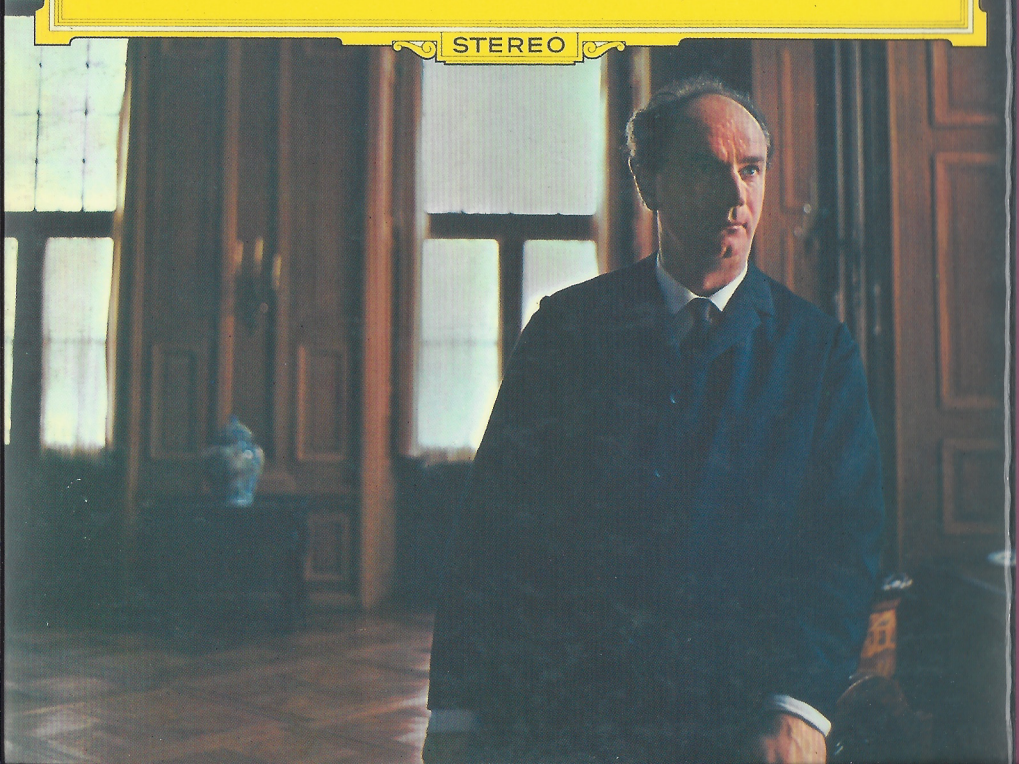
このCDを、著作権法で認められている権利者の許諾を得ずに、①賃貸業に使用すること、②個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、③ネットワーク等を通じてこのCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。

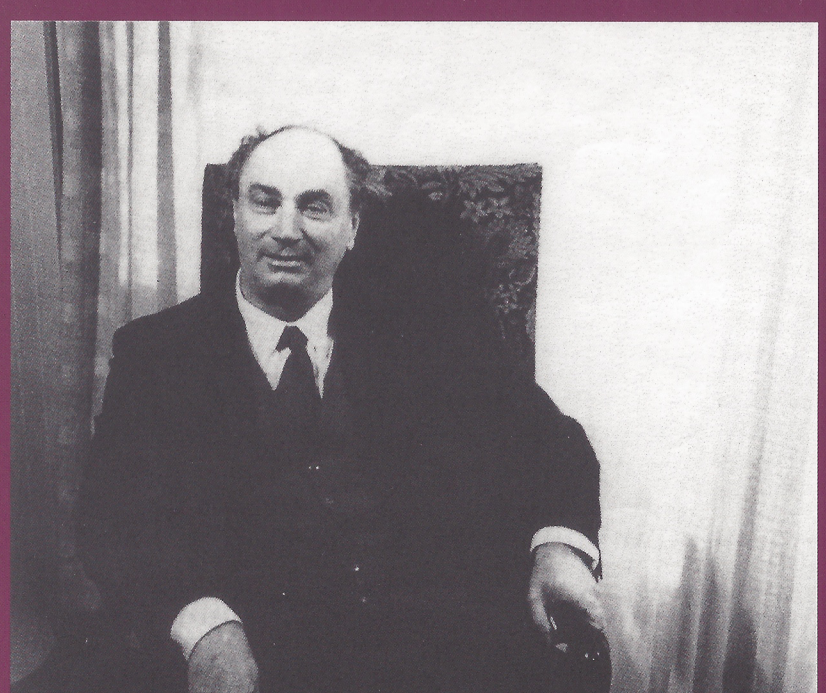
Deutsche Grammophon

DVOŘÁK: SYMPHONY NO. 8

Berlin Philharmonic Orchestra · Rafael Kubelik

STEREO

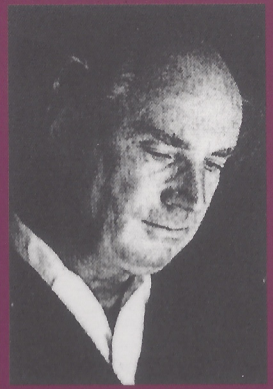




チェコ独特の魅力

1960年代終わりから1970年代初めにかけて、レコード史上、画期的な意味をもつステレオ録音が行われた。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は、ドイツのオーケストラとしては初めて、アントニン・ドヴォルザークの交響曲全9曲、すなわち23歳のときに作曲して本人は一度も演奏されたのを聞いたことがない交響曲第1番から、交響曲第9番《新世界より》までをレコード録音した。チェコ独特の魅力を引き出した指揮者は、1914年にプラハ近郊で生まれたラファエル・クーベリックである。彼は亡命後、情熱に溢れる巨匠として国際的に知られるようになり、ドヴォルザークやスメタナやヤナーチェクなどの同郷の作曲家の作品を指揮した。彼の技量は、1889年に作曲されたドヴォルザークの最も興味深く「モダンな」交響曲第8番、そして音楽院の院長として赴任したニューヨークでホームシックにかかった時期に作曲したドラマチックな交響曲第9番に新しい息吹を吹き込む。指揮者ラファエル・クーベリックは、ひとつの転換をもたらした。ヨーロッパの多くの国では大衆受けをねらった郷土芸術として過小に評価されているボヘミアのシンフォニーは、この誠実な巨匠の手にかかると、真実の姿と個性と卓越した作曲技術を顕にした。最後のふたつの交響曲は、ドヴォルザークが単なる自然児でも、教科書に書かれていることを信じ込んでいる保守主義者でもなく、世紀末に交響曲の概念がもつ問題をはっきり理解し、そして自分のやり方で解決したのだということを雄弁に物語っている。陰影に富んだコントラスト豊かな交響曲第8番で、ドヴォルザークは「私の他のシンフォニーとは違う作品、個性的で、新しく生まれた思想を込めた作品を書きたい」という願望を実現した。それぞれのパートは直線的に進行するが、ときどき風変わりなソロと室内楽風のパッセージが和やかな響きを生み出している。歌曲風の旋律は、ドヴォルザーク崇拝者グスタフ・マーラーを暗示している。1893年にニューヨークで作曲された交響曲第9番は、たちまちドヴォルザークの最もポピュラーなシンフォニーとなった。4楽章ともテンペラメントに満ちている。《新世界より》のサブタイトル、旋律の五音音階的な色づけ、そしてイングリッシュ・ホルンが奏でるラルゴの哀愁は、ドヴォルザークがアメリカ・インディアンの民謡から採ったという憶測を生んだ。これに対してドヴォルザークは次のように答えた。「アメリカ・インディアンの旋律を用いたことは一度もない。私は自分の中で育ったテーマを書き、これにインディアン音楽の特徴を織り込んだにすぎない。私はこれらのテーマを素材にして、現代のリズム論、和声理論、対位法およびオーケストレーションの全成果を展開したのだ」。アメリカ的なものとチェコ的なものとが互いに融合し、まさにドヴォルザーク的な音を響かせる。

この録音を行った当時、ラファエル・クーベリックはミュンヘンに本拠を置くバイエルン放送交響楽団の首席指揮者であり、パレストリーナからバッハ、ウィーン古典派、クーベリックが最も愛するロマン派からオルフ、さらには十二音音楽に至る幅広いレパートリーを指揮していた。また、ベルリオーズの《トロイアの人々》のニューヨーク初演を指揮し、ウィーンとルツェルンの音楽祭に招かれた。日本とアメリカで公演し、批評家K.Hルッペルが賞賛したように「本能と精神の理想的な合体」を見せた。クーベリックは70歳を過ぎるとコンサート・ホールにはほとんど姿を見せなくなった。フルトヴェングラーを彷彿とさせる巨体がリューマチに襲われたので、空気の乾燥した暖かいカリフォルニアに頻繁に出向き、彼はそこで、それまで忙しくてできなかった作曲に専念した。近年になって大転機を迎えたラファエル・クーベリックは、彼の長年の夢をかなえた。40年以上ぶりに再びプラハで指揮をしたのである。自分の青春を過ごし、最も強烈な芸術的印象を受けた、そして彼が世の中に登場したプラハ。プログラムにドヴォルザークが載っていたのは言うまでもない。



カール・シューマン
訳: M&Mインターナショナル
© 1996

交響曲 第8番 ト長調 作品88

この交響曲はイギリスで出版されたことから「イギリス」と呼ばれることがある。1889年の夏から秋にかけて作曲。そのときドヴォルザークは48歳、プラハ音楽院の作曲科教授に迎えられ、オーストリア政府から勲章を授与されたりと、名声はとみに高まっていた。そうした時期の作品だけに、この曲は技法も内容も円熟している。そのうえ、魅力的なメロディに溢れ、交響曲に限らずドヴォルザークの全作品のなかでもとびきり流麗な名作である。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ、ト長調、4分の4拍子、ソナタ形式。哀調を帯びた序奏。ついでフルートが軽やかに第1主題を奏ではじめる。第2主題はフルートとクラリネットの優しい歌。リタルダンドして序奏主題が再現すると展開部に入る。

第1主題が力強く優美に発展、やがてトランペットが序奏主題を高らかに吹き鳴らしてクライマックスを築く。テンポが落ちて静まるとイ

ングリッシュ・ホルンが第１主題を物憂げに奏で、再現部となる。クラリネットの第２主題も再現。これが盛り上がり最後は第１主題の強奏によるコーダを迎えて終わる。

第２楽章　アダージョ、ハ短調、４分の２拍子、三部形式。弦楽器が情感をこめて歌いだす。フルートとクラリネットのファンタスティックなパッセージを挟んでティンパニが轟き、こんどは木管楽器に冒頭の旋律が戻る。ゆったりとしたリズムにのってフルートとオーボエがのどかに歌うと第２部、ソロ・ヴァイオリンがこれにまとわりつく。ホルンが冒頭の主題を吹き鳴らすと曲は一転、緊迫感がみなぎる。第１部が再現。しなやかなリズムの上でヴァイオリンが流麗に歌うとコーダとなり、最後はフェルマータ、消えいるように終わる。

第３楽章　アレグロ・グラツィオーソ、ト短調、８分の３拍子、ヴァイオリンの優美なメロディ。これが木管楽器に歌いつがれていく。中間部ではフルートとオーボエがティンパニの合いの手をともなって民謡風に歌う。主部がほとんどそのままの形で再現したあと、テンポがモルト・ヴィヴァーチェに早まって民俗舞曲調の活発なコーダとなる。最後は弦楽器のトニカがフェルマータでひきのばされ、余韻を残して終わる。

第４楽章　アレグロ・マ・ノン・トロッポ、ト長調、４分の２拍子。トランペットのファンファーレ、ついでチェロが格調高い主題を奏でる。以下、この主題による変奏曲となる。第１変奏は弦楽器とファゴット、第２変奏はテンポを早めてのトゥッティ、第３変奏はフルートと続き、第４変奏では新しい主題が登場、さらに冒頭のトランペットのファンファーレも再現する。第５変奏は弦楽器のみ、第６変奏はクラリネットとオーボエ。このあと濃密な夜の気配が漂うパッセージとなるが、突如、静けさを切り裂いてトゥッティとなり、そのまま熱狂的なフィナーレを迎える。

交響曲　第9番　ホ短調　作品95《新世界より》

ドヴォルザークは３年余におよぶアメリカ滞在中に、黒人やアメリカ・インディアンの音楽を研究、いつものボヘミア民族音楽のほかにそれらのスピリッツを織りこんだ作品をいくつか書いた。最後の交響曲《新世界より》もそのひとつで、1893年の作曲。

第１楽章　アダージョ（序奏部）―アレグロ・モルト、ホ短調、４分の２拍子（主部）、ソナタ形式。ミステリアスなムードの序奏部。第１主題の前触れが聞こえる。ホルンが勇壮な第１主題を響かせて主部に突入する。フルートとオーボエの軽快な第２主題とフルートの寂しげな結尾主題は、ニグロ・スピリチュアルやインディアン音楽の匂いを放つ。展開部は結尾主題、第１主題の順で簡潔に展開。再現部はかなり自由奔放。最後は第１主題が勇壮に鳴り響いて終わる。

第２楽章　ラルゴ、変ニ長調、４分の４拍子、複合三部形式。コラール風の荘厳な序奏に続いて、イングリッシュ・ホルンの歌。この哀愁を帯びた懐かしいメロディは、のちに歌詞がつけられ〈家路〉として歌われるようになった。中間部ではフルートとオーボエに新しいメロディがあらわれる。やがて緊迫したムードとなり、第１楽章の第１主題、結尾主題が回帰する。最後は〈家路〉のメロディが切れ切れに流れコラールの中に消えていく。

第３楽章　スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ、ホ短調、４分の３拍子。短い序奏。戦闘的な舞曲の合間に、民謡調の第１トリオ、素朴な舞曲調の第２トリオが挟まれる。最後にまたも第１楽章の主題が甦って、終わる。

第４楽章　フィナーレ、アレグロ・コン・フオーコ、ホ短調、４分の４拍子、ソナタ形式。SLの発進（ドヴォルザークはたいへんな鉄道マニアで、暇さえあればニューヨークのグランド・セントラル駅にSLを眺めにでかけたという）を思わせるような、パワフルな序奏に導かれて、トランペットとホルンが雄々しく第１主題を吹き鳴らす。第２主題はクラリネットの優美な歌。展開部では前の３つの楽章の主題が次々と回想される。自由な再現部を経て、各楽章の主要主題がからみあいつつ、曲を閉じる。

壱岐邦雄

© 1996

ADD

Recording: Berlin, Jesus-Christus-Kirche, 6/1966 (op. 88), 6/1972 (op. 95)
Executive Producers: Otte Gerdes (No. 8); Dr. Rudolf Werner (No. 9)
Recording Producer: Hans Weber
Tonmeister (Balance Engineers): Günter Hermanns (No.8); Heinz Wildhagen (No.9)
℗ 1966 (No. 8) / 1973 (No. 9) Deutsche Grammophon GmbH, Berlin
© 1995 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin
Photos: Jack Mitchell (Cover), Siegfried Lauterwasser

DSD Remastered by Emil Berliner Studios, 7/2011

EMIL BERLINER STUDIOS

■ユニバーサル ミュージック携帯サイトへのアクセス方法
◇iモードをご利用の方　メニューリスト⇒映画/音楽/アーティスト⇒音楽情報⇒ユニバーサル ミュージック
◇EZwebをご利用の方　au oneトップ⇒メニューリスト⇒音楽・映画・芸能情報⇒レコード会社⇒ユニバーサル ミュージック
◇Yahoo! ケータイをご利用の方　メニューリスト⇒芸能・映画・音楽⇒レコード会社⇒ユニバーサル ミュージック
■ユニバーサル ミュージックのホーム・ページ　http://www.universal-music.co.jp/

取り扱い上のご注意●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。
保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●ジャケットや付属の投込み類が変形したり変色しないよう注意して下さい。